

タヲレケリ、其地震七十餘日不^止シテ、アマツサヘ八月廿七日廿八日兩日ノ間ニ、遠江國工大浪オビタマシク來リ、陸地忽ニ海トナル、今ノ今切ノ渡ト申ハ是也、カヤウノ天地ノ變、如何様天下治リアラジト心有ル人ハナダキ合ケリ、

〔高代寺日記〕永正七年八月廿七日、遠州今切崩ル、

〔遠江國風土記傳〕濱名郡新井○中

荒之崎○中

寶永四年關司政愈書曰、○中 永正七年八月廿七日、波濤中斷於驛路又破橋矣、從是以來湖水變爲潮海、橋本驛家沒置新井宿也、

〔宗長手記〕大永六年○中 ひくまの野邊名所なり、こゝを立て濱名橋、ひとゝせの高沙より、あら海おそろしきわたりすとて、此たびの旅行までと、なにとなく心ぼそく物悲くて、

たびくのはま名の橋も哀也けふこそ渡りはてぬと思へば

〔東武紀行〕あら井の渡して、白須香の海にのぞみ

亥ら菅のねざしも亥らでよる浪の岩にくだけて引ぞわづらふ

〔信長公記十五〕天正十年四月十七日、濱松拂曉に出させられ、今切之渡り御座船飾、御舟之内に而一獻進上申さる、其外御伴衆舟數餘多寄させ、前後に舟奉行被付置、無由斷させらる、御舟御上りなされ、七八町御出候て、右手にはまの橋とて、卒度したる所なれ共、名にしおふ名所也、家康卿御家來渡邊彌一郎と申仁、さかしく濱名之橋、今切の由來、舟かた之子細條々申上に付て、神妙に思食れて、黄金被下、手前之才覺面目也、

〔扶桑拾葉集二十八〕あづまの道の記

白洲加に至る、是は白菅を俗に亥らすかと云なるべし、一里ばかり行て海少入たり、○中 是より

藤原光廣